

サラワク州イバン村落における移動湿地田稲作の変遷

市 川 昌 広*

Transformation of Shifting Swamp-Rice Cultivation in an Iban Village of Sarawak, Malaysia

Masahiro ICHIKAWA*

Although wet rice is generally grown by sedentary cultivation in Southeast Asia, the Iban people in Sarawak have long practiced shifting cultivation of wet rice which is called *padi paya* (swamp rice). Based on my survey and observations in an Iban village, this paper deals with the characteristics of this type of rice cultivation and its roles in the life of the villagers. During the field-work in the village, the changes in location of rice fields, frequency of shifting, rice-growing techniques, and socio-economic background of rice growing were investigated.

The development of rice cultivation in the study area can be divided into three stages: the pioneer period from 1900 to 1950, the market-oriented period from 1950 to 1985, and the period of reduction from 1985 to the present. In the first period, rice fields were made through the reclamation of primary forests. As people were primarily concerned with obtaining land rights through this reclamation, they changed the location of their fields very frequently, every one or two years, by successive clearing of the forests. In the second period, when the rice price was rising, rice fields were expanded in order to increase production. Fields were abandoned after three consecutive years of cultivation, and new fields were opened in the secondary forest. In the third period, when off-farm job opportunities increased, rice fields were reduced in size and became concentrated near the longhouse. Although shifting cultivation was still practiced, many villagers cultivated the same fields for longer periods of four years or more.

The Iban people's swamp rice cultivation has two distinctive characteristics: shifting cultivation and broadcast seeding. With these two methods, the size and location of rice fields can easily be changed in accordance with socio-economic changes, and shifting swamp-rice cultivation has thereby continued to support the life of the villagers.

I は じ め に

東南アジアでは、一般的に焼畑での稲作は移動を伴うのに対して、水田での稲作は定着しておこなわれる [高谷 1985]。島嶼部においても湿潤気候下にある湿地での移動水田がやがて畦畔や水路の造成などを経て、次第に定着していく様子が報告されてきた [Seavoy 1973]。これに対して、本稿で取り上げるのは移動を常としている水田である。本稿では、調査村で見られる水

* 京都大学大学院人間・環境学研究科；Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, 46 Shimoadachi-cho, Yoshida, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan

田を湿地田と記している。村びとが水稻栽培地を呼ぶ際のイバン語の *umai paya* (*umai* は稲作地, *paya* は湿地の意味) を訳した言葉である。湿地田は一般に灌漑を伴わないが、湿潤な気候と地形的条件のため雨や氾濫水により常に多湿である。以下では、単に田と表現した場合は湿地田を指す。なお、調査村において稲作は、湿地田で水稻栽培が見られた一方、丘陵斜面などの比較的乾いた土地の森が開かれた焼畑では陸稲栽培がおこなわれていた。

調査村でおこなわれる湿地田稲作は、田を開く場所の植生が伐採や除草剤によって除かれ、火入れされた後に耕起なしで、散播か移植による植付けがおこなわれるというものである [市川 2000: 79–85]。調査村の立地する地域はこれまで移植稲作地帯と考えられてきたが、湿地田稲作の現況をあつかった前稿で、筆者はこの稲作の植付け技術の基本は散播であると結論づけた [ibid.: 92]。本稿では、湿地田稲作の特徴についてさらに深く考察するために、調査村での入植時から今日に至るまでのその稲作の変遷の様子を概観している。その結果、散播以外にこの稲作を特徴づけているのが田の移動であることがわかってきた。東南アジアを含む熱帯地域に見られる移動耕作において、農地の放棄、移動の理由は雑草の発生や土壌の肥沃性の低下などの栽培学的な合理性が強調されてきたが [佐々木 1970: 105–108]、N村で田の移動が起きるのには、栽培学的な合理性に加え、土地の占有権を得るための慣習、米市場、農外就業の機会などという稲作世帯を取り巻く社会・経済的な背景が大きく影響していた。例えば、村への入植後、土地の占有権を得るために原生林を盛んに開拓していた時期がある。イバンの原生林開拓については、山地での焼畑を対象に研究をおこなった Freeman [1955] の報告で知られており、ここでは精力的に原生林を拓いて焼畑を作っていくイバンの姿が「森の蚕食者」と表現されている。この現象は、調査村では、焼畑がおこなわれる斜面とは水文条件がまったく異なる湿地においても同様に見られたようで、そこではやはり開拓のために原生林が次々と拓かれ、田が作られた。当時は1～2年間、ひとつの田で米を栽培した後、そこを放棄し、新たな原生林に移って田を開いたという。その後、米の商品性が高まった時期には、それに対応して、大量の商品米が作られた。高谷 [1978: 33–34] は、湿潤な東南アジア島嶼部の湿地では、旺盛な植生回復などの自然環境に制約されて、商品米を作るための大きな経営面積での稲作は向かないと考察している。しかし、調査村では、田が広げられることによって米が増産された。この時期には、田が米の増産に適した地区に移動・集中した。そして、その地区内の二次林に開かれた田は3年連作された後に放棄され、新たな二次林に再び田が開かれた。次に、米の商品性が低下し、稲作以外の仕事の重要性が高まってきた近年においては、田は道路沿いの生活拠点の周辺に移動・集中するようになり、多くの田で連作年数の長期化が進みつつあった。

前稿 [市川 2000] の結果を加味して、湿地田稲作について検討した本稿の結論を先取りすれば、調査村で見られた稲作は、散播と田の移動が深くかかわっている散播移動湿地田稲作であるということだ。この稲作様式を持っていたことにより、村びとは湿地においても「森の蚕食

者」のごとく原生林を開拓でき、米の需要の高まりに応じて商品米の生産をおこない、逆に商品性が落ちると田は即座に小さくなって生活拠点の周辺に集中するといった、社会や経済の変化に対応した稲作が可能であったと考えられる。

本稿では、このような稲作について述べるために、最初に、以下のⅡで調査村の概要を説明している。続いてⅢでは、航空写真や聞き取りからわかった過去の調査村の田の移動や分布の変化がどのような背景で起きたのかを知るために、村の開拓当時から調査年までを大きく3期に分け、各時期の社会や経済の状況を説明している。最後に、Ⅳではまとめとして、田の移動の理由および移動と散播技術との関係を考察した後、調査村で見られた湿地での稲作が散播移動湿地田稲作として定型化できることを結論づけている。

現地調査は、調査村において1996年2～6月および10～11月におこない、1997年7～8月および1998年8～12月に補足資料の収集をおこなった。調査では、村びとの家に下宿しながら、村の過去の湿地田稲作および生活・生業や周辺地域の状況について、村びと、近隣町の華人商人、およびサラワク州農業局の農業普及員からの聞き取りをおこなった。また、いくつかの世帯においては過去に開いた田の場所を聞き取り、その位置の測定をGPSと地形図を用いておこなった。現況の湿地田稲作や村の生活・生業については、観察と聞き取りでの調査をおこない、特に湿地田については、その面積をコンパスと巻き尺によって、その位置をGPSと地形図によって測定した。村びとへの聞き取りはイバン語によって筆者自身が直接おこない、田の面積の測定の際には村びとを助手として使った。また、航空写真の閲覧や政府機関の過去の刊行物などの関連資料の収集をおこなった。

Ⅱ 調査村（N村）およびその周辺の概要

調査年におけるN村およびその周辺の概要については、市川〔2000: 76–78〕で報告済みなので、ここでは重複する部分はごく簡潔に述べ、村の歴史を理解する上で必要な事項を中心に記述する。

1. N村の起こり

N村が位置するバラム Baram 川流域へのイバンの移住は、当時のイギリス人為政者ブルック Brooke の決定により1891年から始まり¹⁾〔Pringle 1970: 271–272〕、それ以前は皆無であったイ

1) バラム Baram 川流域は、1882年にブルネイからサラワクへ割譲されて以降、要塞の建設による統治の拠点造りや、移住者および先住者による林産物採集とその取り引き場としての商人町の設置により、政府による統治と地域の経済的発展が始まった。新たにサラワク領として獲得された地域では、そこから採集されるラタン、野生ゴム、樟脳、ダマールなどの林産物による交易からの収入がサラワクの経済にとって重要であり〔Pringle 1970: 267〕、政府は、バラム川流域に自生する林産物の採集者としてイバンに期待していた。ブジャライ慣行（*bejalai*：若い男による旅や出稼ぎ慣行）でしられるイバンは、当時、土地不足が深刻であった第2省や3省から、未開拓地と林産物が豊富なバラム川流域に新天地

バン集落が当流域に次々と形成されていった。²⁾ N村は、このような状況の中でバラム川の支流であるバコン Bakong 川沿いに形成された村のひとつであった(図1)。村の伝承によれば、入植年は1900年頃と推定される。³⁾ 入植当初は、バコン川の支流でN村内を流下するソン Song 川を少しさかのぼった場所に6世帯がロングハウスを構え、開拓を始めた。

なお、イバンは一般にビレック *bilek* (居室) が集合して作られるロングハウスに集住する。ひとつのビレックに住むメンバーは、多くの場合血縁で繋がり、生計を一にする独立した集団を構成するとされ、Freeman [1955: 3-8] はそれをビレック家族と呼んでいる。聞き取りや観察によれば、調査年または過去において、N村でもやはりビレック単位で生計がたてられており、

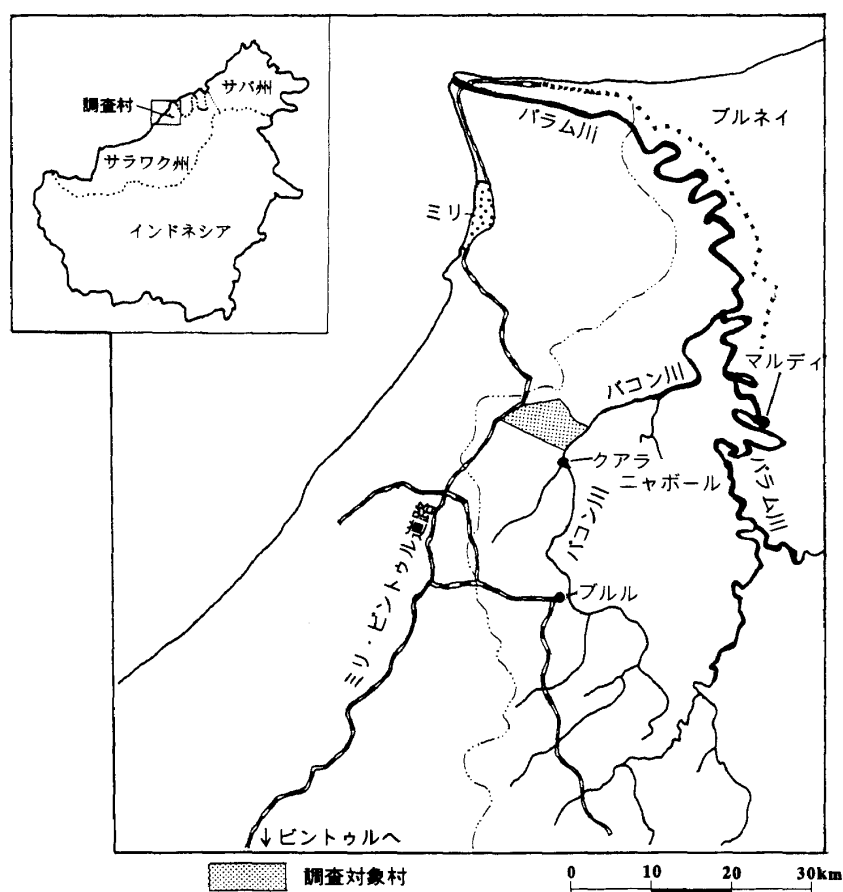


図1 調査地域

- を求めて盛んに流入していった [The Sarawak Gazette (以下, SG) 1/3/1883: 26; 1/5/1884: 44]。
- 2) イバンのバラム川流域への移住の様子は, Sandin [1994: 227-228] に示されている。また, SG にバコン川へのイバンの入植が最初に報告されるのは1900年 [SG 2/7/1900: 139] で, その後, バコン川流域のイバンに関する記事が増えてくる。1907年の人口調査では, バラム川流域のイバンは1,960人と当流域全人口の約12%を占めるに至った [SG 4/4/1907: 83]。
 - 3) 村の伝承によれば, 近隣のマラン Malang 村の入植後, ほどなくそこから別れた一部の村びとが現在のN村に再入植したとされる。マラン村の入植年が1896年 [Sandin 1994: 228] と判っているので, N村への入植年は1900年頃と推定される。

本稿で「世帯」という場合はこのビレック家族を指す。

2. N村およびその周辺の概要

今日のN村の領域は,⁴⁾ ミリ・ビントウル道路 (Miri-Bintulu Road: 以下 MB 道路) とバコン川に挟まれて分布しており (図1), その面積は約 37 km² である。調査時 (1996年) の村の人口は454人, 人口密度は12人/km² と希薄であった。さらに, 出稼ぎなどで人の出入りは激しく, 1995年5月～1996年6月の1年間で6カ月以上村に滞在した者は262人であった [市川 2000: 78]。

バコン川およびバラム川の中・下流域には湿地が広く分布している。しかし, バコン川中流の左岸側には, 川沿いには湿地が広がるものの, その背後には丘陵が分布しており, N村は川沿いの湿地と丘陵地によっておおよそ半分ずつ占められている (図2)。バコン川沿いに広がる

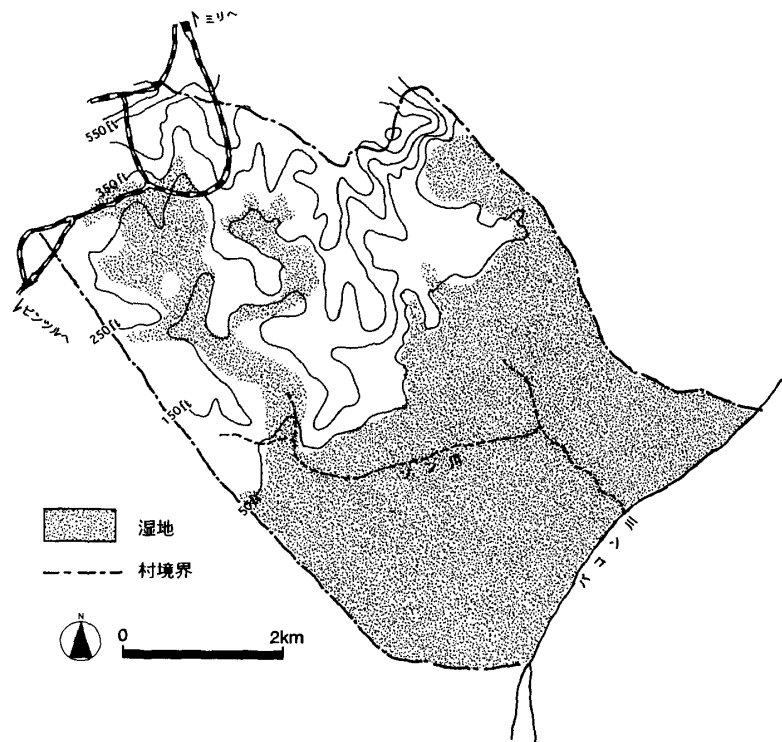


図2 湿地の分布

出所: 現地調査と地形図から筆者が作成。

4) ここでいう村の領域とは, 村びとがそれと認識し, 何らかの利用をしてきた範囲である。村の伝承によれば, 政府の政策に基づいて入植した村びとは, バコン川左岸の開拓が認められ, 同じくバコン川沿いに入植した隣接村との間に入植時点で境界が設定されたという。この境界を政府は「Map Books」に記録し, 土地争いなどを調整していたようである [SG 1/12/1925: 321]。このようにN村ではバコン川が村の南東側の境界として, また, 川から直角方向には両隣の村との境界が入植当時から定められていた。一方, 村の北西側の境界は, 村びとによれば1972年に設定された国立公園までとされている。サラワクの土地法 (Land Code 1958) は, 先住民の慣習的土地占有を制限付きで認めている。イ

湿地は標高 15 m 以下で、そこから北西方向に向けて徐々に高まり MB 道路周辺では標高約 150 m ほどになる。丘陵地でも、谷部には平坦な湿地がある程度の面積で広がっており、そこでは湿地田稲作がおこなわれていた。逆に、湿地でもバコン川沿いに近接した地帯は冠水害を受けやすいため稲作には不向きとされる。土壌については、バコン川沿いの湿地には泥炭土壌や沖積土が広範に分布する一方、丘陵斜面には赤黄ポドゾル性土壌が、丘陵地の谷部には砂質土が広く分布している [Department of Agriculture Sarawak 1972]。この辺りの降水量は、年間 2,900 mm 程度で、すべての月で 100 mm 以上の降雨が見られる [Department of Statistics, Malaysia 1997]。

N村とかかわりの深い周辺の町村は、ミリ Miri, マルディ Marudi, ブルル Beluru, クアラニャボール Kuala Nyabor などである (図 1)。ミリは、1910年の油田開発以降発展し、今日では市街地人口約10万3千人 [ibid.] を擁する州第3番目の都市に発展している。マルディは、バラム川流域の開発の拠点となってきた町で、今日では130軒程度の主に華人の商店が見られる。ブルルはバコン川流域の中心となってきた町で、今日では20軒程度の華人の商店が見られる。また、クアラニャボールには、1985年までは4軒の華人の商店があり、N村を含む周辺のイバン村と取り引きがあったが、現在は無人である。

III 社会・経済的な状況の変化と湿地田稲作の変遷

図3に示すように、航空写真や聞き取りから湿地田の分布は、調査年までの50年ほどの間にも大きく変化してきたことがわかった。村びとによれば、この変化は、田が集中して作られる地区が年代ごとに異なるために見られるようだ。さらに、田の移動頻度も年代によって異なるという。例えば、ある時期にはひとつの田を1～2年の栽培後に移動、別の時期には3年連作後に移動、さらに異なる時期には4年以上の連作後に移動するなどである。聞き取りを進めると、過去の田の分布と移動には、村の社会・経済的状況の変化が背景として大きく影響していることがわかった。湿地田稲作の状況にしたがって、村の歴史はいくつかに時期区分される。すなわち、村への入植時から調査年までにおいて、村の開拓期 (1900年頃～1950年頃)、米が商品化した時期 (1950年頃～1985年頃)、および稲作が縮小した時期 (1985年頃～調査年 (1998年)) の3期である。以下、この時期区分に従い、各時期の社会・経済的背景と湿地田稲作の移動の特徴について述べる。

なお、以下で述べる村およびその周辺の状況は、ことわりのないかぎり、N村の村びとから

- ↘ バンの慣習では、最初に原生林を拓いた者にその土地の占有権が認められるが、土地法では1958年以降に拓かれた土地に対しては占有権が認められていない。上で述べたN村の領域内には、この規定によれば村びとに占有権がない土地が存在するが、これまでのところそれらの土地も政府からの強い制限を受けることなく村びとによって利用されてきた。

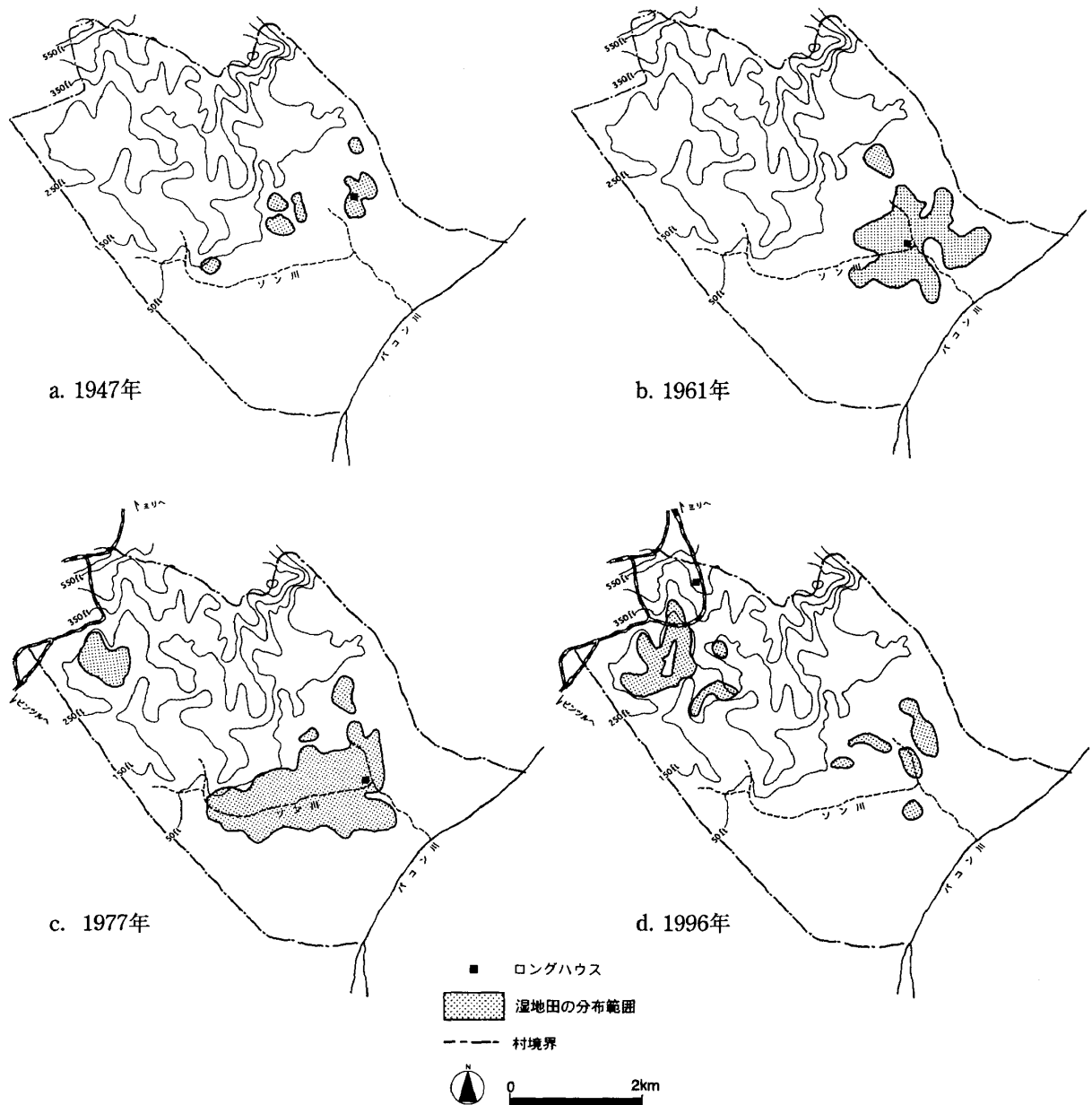


図3 湿地田の分布範囲の変遷

出所：a～cは、各年の航空写真〔Land & Survey Department〕を基に作成した。dは地形図とGPSを用いた現地調査により作成した。

の聞き取りにより調べられた。また、図3は調査年（1996年）を除き、当該年の航空写真から作製された。数筆かたまった湿地田が連作されると、栽培期間外でも遠くから見ればそこは一団の草地として認められる。航空写真に写っているその草地部分がトレースされたものである。したがって、必ずしも当年に開かれた田をあらわしているとは限らないが、⁵⁾ 当時のだいたいの

5) 村びとによれば、二次林を開いた田で3年連作後そこを放棄すると、おおよそ3～5年でそこは低木

田の分布概要を知ることができる。

1. 村の開拓期（1900年頃～1950年頃）

（1）村を取り巻く社会・経済的背景

a. 土地占有権を得るための原生林開拓

入植当時（1900年頃）から1950年頃までは、原生林が次々と拓かれる村の開拓期であった。村びとからの聞き取りや、航空写真（1947年）によれば、1940年代後半には開拓前線が今日の村境である MB 道路近くにまで至っていた。村の伝承によれば、入植以前の N 村周辺は、農耕をおこなわない狩猟採集民のプナン Punan の領域であり、⁶⁾ 入植当時、辺りは原生林（*kampung amat*）によって占められていた。入植者達は、その原生林を焼畑栽培や湿地田稲作⁷⁾をおこなうために切り拓いた。彼らにとってこの行為は、日常生活の糧を得るためであると同時に、土地を保有するために欠かせなかった。イバンの間では土地の先取占有権が慣習的に認められており、最初に原生林を拓いた者とその直系子孫がその土地の占有権を持つ。入植者たちは自分の土地を拡大するために盛んに森を拓いた。開拓期全般を通して村では、湿地田にもまして丘陵斜面に作る焼畑の方が重要であったという。これは、陸稲米の方が香りと食味において勝ることに加えて、自給自足性が高かった当時、焼畑からは米と同時に副食野菜がとれたことが大きな理由とされる。しかし、焼畑とともに湿地田も毎年作られており、湿地の原生林も次々と拓かれた。

当初、バコン川流域でとれた米は、政府関係者の消費用に売られたり [The Sarawak Gazette (以下, SG) 1/11/1911: 219; SG 1/8/1918: 198], 納税品として利用されていた。⁸⁾ また、1930年代では余剰米が出たときにはそれを華人商人に売ったこともあるという。しかし、それらの量は限られており、当時は生産された米のほとんどが自給用に供されていたという。

b. 盛んな林産物の採集

この時期に N 村でおこなわれていた主な生業は、焼畑栽培と湿地田稲作に加えて、商品としての林産物の採集であった。⁹⁾ その採集は N 村周辺のバコン川沿いとともに、村から遠く離れた

↘ からなるブッシュになり、7～10年で再び本田準備のために伐採可能な林になるという。また、村でこれまでおこなわれてきた土地利用のうち湿地を草地化させるのは湿地田稲作のみである。

6) 当時バコン川周辺の森は、プナンによって広く利用されていたようである。N 村よりさらにバコン川の上流のラオン Laong へもプナンの生活圏にイバンが入植した例が示されている [SG 1/4/1902: 79]。N 村の伝承によれば、村周辺のプナンは、バコン川上流やティンジャール Tinjar 川へ移ったとされている。

7) 村の伝承によれば、湿地での稲作は入植当時からおこなわれていた。種籾は先住地であるニェロン Nyeron 川流域から持ち込まれたという。ニェロン川は、サラワク最大の河川ラジャン Rajang 川の下流域に流れ込む。ニェロン川流域には、湿地が広がっていて今日でも水稻栽培がおこなわれている。

8) バコン川流域を含むいくつかの地域では、米の物納が定められており [SG 1/4/1920: 86], 実際にその記録もされている [SG 5/6/1906: 145; 16/9/1913: 219]。

9) 1) で述べたとおり、バラム川流域へのイバンの移住を促した理由のひとつがこの地域の豊富な林産物 ↗

他流域でもおこなわれた。バコン川沿いの湿地林では、豊富に自生する野生ゴムのジュルトン (*Dyera* sp.)¹⁰⁾ やラタンが採集され、マルディから定期的に来航する華人の屋形船 (*bandong*) に、また、クアラニャボールに華人商人が進出した後は彼らに売られた。村びとが余剰米や林産物を売った華人商人は、バラム川流域のマルディに1883年にはじめて到来し、¹¹⁾ その後、流域の各地へ拠点を広げるようになった。バコン川流域へは、ブルルに1920年頃、¹²⁾ また、N村に隣接するクアラニャボールに1930年頃¹³⁾ 進出した (図1)。

上記のように、開拓期を通じてN村でおこなわれた主な生業は、原生林を精力的に拓いた焼畑または湿地田での稲作と林産物の採集であった。¹⁴⁾ 主に村外に出掛けておこなわれた林産物の採集は、男の仕事であったため、この当時、焼畑栽培や湿地田稲作は、村に残った女が中心となっておこなわれた。

(2) 湿地田の移動と分布の状況

a. 原生林開拓のための頻繁な田の移動 (開拓期初期)

原生林は、ロングハウスが建てられた地点を中心として、そこから外へ向かって拓かれていった。ロングハウスから遠く離れた原生林を拓く場合は、出作り小屋 (*langkau*) を建て、そこに滞在しながら作業をおこなった。¹⁵⁾ 森林が拓かれたところは雑草が少なく、植付け後の除草の手

↘ 物の存在であった。1940年代以前にも林産物の採集以外に、製材所や道路建設現場などでの出稼ぎは見られたものの、そこでの雇用機会はわずかであったと村びとはいう。

10) マルディからのジュルトンの積み出しは1901年に始まり [SG 1/2/1902: 1], その後、主要な林産物のひとつとして地域の住民達により盛んに採集された。

11) 1885年にマルディには、45軒の商店があり、400人の華人およびマレイの商人が住む町に発展した [Chew 1990: 75]。

12) ブルルの長 (*kapitan*) からの聞き取りによる。太平洋戦争直前 (1940年頃) には5軒の店があったという。

13) N村の古老からの聞き取りによる。

14) パラゴムノキ (*Hevea brasiliensis*) は、20世紀初頭にサラワクに紹介され、特に第2省 (現在のスリアマン省) では、植栽可能な場所には植え尽くされた [Cramb 1988: 112] と表現されるほど、イバンによって盛んに植えられた。しかし、N村やその周辺村落では戦争開始 (1941年) 前までは、それほど盛んにパラゴムノキの栽培はおこなわれていなかった。これは、バコン川流域ではその当時がちょうど原生林の開拓期と重なっていたことに加え、野生ゴムが豊富で値がよかったためパラゴムノキを植栽する動機付けが低かった [SG 16/3/1917: 73] ことが理由として考えられる。さらに、1934年以降は国際ゴム協定 International Rubber Agreement に基づく生産調整の影響によって、太平洋戦争前はパラゴムノキの植栽は進まなかったという。N村において、パラゴムノキが植えられるようになるのは戦争開始 (1941年) 以降であったといわれる。

また、焼畑栽培と湿地田稲作、および林産物採集の仕事の規模は常に一定ではなく、時々の状況に応じて変化していたようである。SGには、バラム川流域においてしばしば発生する旱魃害、洪水害、また、獣虫害による米の不作時には、米の購入のために林産物採集に精が出され [SG 17/1/1910: 26; 1/4/1915: 79], 林産物の価格が悪い時や林産物の収穫期が米の収穫と重なった時はその採集がおこなわれない [SG 1/4/1931: 87; 2/12/1935: 234], また、イバンであるかは不明だがミリ近郊の多くの村びとがミリでの石油採掘関連の仕事に従事したため、米の作付けが減った [SG 2/1/1930: 25; 1/8/1930: 203] といった記録が残っている。

15) フリーマンは、ロングハウスから遠く離れた原生林を拓く場合、焼畑から近い場所にいくつかの世帯 ↗

間がかからないため、3年間は連作可能である。しかし、入植後しばらくは、ほとんどの村びとは3年間の連作をせず、2年連作または連作をしないで毎年のように新たな原生林を拓き、田を作ったと伝えられている。これは、先に述べたイバンの土地の先取占有の慣習の下、村びと自らの土地を拡大していくためであった。いったん開かれた田が放棄されると、草地から林地へと植生が遷移し、二次林が形成されていく。

栽培方法は、原生林を伐り倒した後、火入れをして田を開き、その後、散播により植付けをおこなうというものであった。斧しかなかった当時、原生林の伐採は重労働でかつ危険な仕事であり、¹⁶⁾ 男によってのみおこなわれた。林産物採集などのために村外に出て行った男達も、本田準備の時期には帰村し、伐採作業に従事した。伐採・火入れに続く散播による植付けは手間はかからなかった。村びとは、森を拓いた田での植付けは、移植より散播の方が効率的であるため、必ず散播でおこなっていたという。移植では焼け残った多くの倒木や株をくぐり、またぎながらの作業となり手間がかかるためであると説明してくれた。

b. 開拓期後期には二次林にも開かれた田

1940年代後半になると頻繁に冠水するバコン川に近接した地区と、当時のロングハウス（図3a）からのアクセスが悪く、表土が薄い丘陵の尾根部を除いておおむね原生林は拓かれ終わった。また、村内に二次林が増えてくる1930年代以降になると、村びとはロングハウスから遠く離れた原生林を拓く一方で、ロングハウス近くでは二次林を開いて田を作った。二次林に開かれた田では、散播稲作で3年連作した後、そこを放棄し、新たな二次林へ移った。この二次林に開かれた田が、図3aに示した1947年頃の湿地田の分布としてみとめられる。この分布域以外にも、村びとによれば、当時、焼畑や田は村の周縁の開拓前線に点在していた。航空写真からも原生林が拓かれた栽培地らしき存在は認められるが、田は草地として明確に判読できなかった。これは、村びとが言うように、原生林伐採後、短い連作期間で田が放棄されたため、草地化が進まなかったのであろう。

航空写真に現れた田の分布面積が小さいのは、開拓前線に点在していた田が含まれていないことと、当時、湿地田稲作より焼畑が盛んにおこなわれていたことに加え、村の人口規模が小さかったためと推察することができよう。村の規模は入植当時の6世帯から1930年頃では12世帯、1941年では25世帯、1950年では29世帯と増えたが、後の1960年代および1970年代と比べれば村の世帯数はまだ少ない。

以上のように、開拓期の後半には二次林が開かれたものの、この時期全般を通じて特徴的な

↘ が集まった小ロングハウス状のダンパ（*dampa*）が建てられ、さらに各々の焼畑に世帯ごとの出作り小屋（*langkau*）が建てられると報告している [Freeman 1955: 33]。しかし、N村ではダンパの設置は稀で出作り小屋のみが建てられることが一般的であったという。

16) 村びとによれば、原生林に林立する巨木を伐採する際は、足場を組んで板根のさらに上部を斧で伐った。当時1本を倒すのに1日要することも普通であったという。

のは、ひとつの場所で1, 2年の栽培後、田を移動させる散播稲作で次々と原生林を拓いていった点である。

2. 米が商品化した時期（1950年頃～1985年頃）

(1) 村を取り巻く社会・経済的背景

a. 米の商品化の背景

サラワクでこの時期盛んになった産業のひとつに木材の商業伐採がある。太平洋戦争前の木材伐採は規模が小さかったが、¹⁷⁾ 戦後は主に海外への輸出を目的とした商業伐採が次第に大規模化していった。¹⁸⁾ バラム川流域では1960年代はじめに木材資源開発の可能性が報告されるようになり [SG 30/9/1963: 230], 1960年代終盤以降、盛んに伐採がおこなわれるようになった [SG 31/7/1969: 180]。

マルディの華人商人によれば、1960年代以前にも戦後復興してきたマルディやミリからの米の需要があり、バラム川流域の村から米は買われていた。これに加えて、1960年代以降に盛んとなった商業伐採に伴って、バラム川流域に数多くの伐採キャンプが出現し、そこからの米の需要によりその取扱量が急激に増加したという。また、1970年代には輸入米の価格が高騰したことにより、現地米の需要がさらに高まったと考えられる。¹⁹⁾ このようにして、1960年代および1970年代のバラム川流域の米の商品性は飛躍的に高まった。マルディの華人商人によれば、バラム川流域の中でもバコン川流域は米の最大の供給地であり、そこで取れた米はすべて一旦マルディに運ばれた。バコン川流域の生産量が多かったのは、田を作れる湿地が豊富にあることに加え、イバンが多いからであるという。バラム川流域の広い範囲で、複数の民族を相手に取り引きをしてきたその華人商人は、イバンは流域内の他民族に比べ、時々の商品性の高いものに特化して生産する傾向が強いと認めている。このような背景の下、バラム川流域の米の生産量は、サラワクの他地域に比べて格段と高くなった。²⁰⁾

17) 例えば、ミリで必要な建設資材を得るために、バラム川でも1920年頃から製材所が設置されており、小規模ながら木材伐採はおこなわれていた [SG 2/8/1920: 176]。

18) 戦後から1960年頃までは、軌道車による搬出方法の登場により湿地林のラミン *ramin* 材が伐採の対象となり、その後1960年代からは、チェンソーおよび木材伐出や林道造成のための重機の登場により、山地のフタバガキ科の樹木が対象となって大規模な森林伐採が進められていった [Kaur 1998; SG 30/9/1963: 230]。

19) 国際的な影響を及ぼした食糧危機（1972年）や2度のオイルショックの影響を受けて1970年代の輸入米の価格は乱高下した [小田 1999: 111]。サラワク政府の補助により米の価格はある程度統制されていたものの、1971年の24.46リンギット/100 kg が1974年には33.90リンギットと約1.4倍上昇した [Department of Agriculture Sarawak 1981]。1972年以降の国際的な米価の値上がりのひとつの要因として水田が増加した例は、西カリマンタンでも報告されている [Seavoy 1980: 63]。

20) 福井 [1980: 712] の推計によれば、1974～75年のサラワクにおいて、中国人による商業的稲作がおこなわれていたマトウ／ダロ Matu/Daro 県 (district) を除き、一人当たりの籾の生産量が 400 kg 近くに達したのはN村の属するバラム県の他はリンバン Limbang 県のみであった。

b. 村に残った労働力

1950年頃から1980年頃までは、稲作と同様、植栽されたパラゴムノキ (*Hevea brasiliensis*) の樹液採取が村で重要な生業のひとつであった。N村でのパラゴムノキの植栽は戦中から徐々におこなわれ始めたが、特に盛んになったのは1950年代および1960年代前半のゴムの価格が好調な時期であった。²¹⁾ 当時のゴムの仕事の活況は、村外から樹液採取をおこなう働き手 (*kuli*) が入れ代わりN村に流入し、²²⁾ 最盛期には10人以上が住みついていたという話からも想像できる。村びとも、ゴムの価格がいいときには稲作の規模を小さくしたり、稲作作業の手を抜いてまでゴムの作業に時間を割いた。ゴムの価格は1960年代後半から1970年代前半にかけてやや低迷するが、これが1970年代の商品としての米の重要性をさらに高めた一要因になったのであろう。また、N村では1970年前後からコショウが農業局からの補助 (Pepper Subsidy Scheme) を受けて植えられるようになった。²³⁾

村外に出かけておこなわれたジュルトンやラタンなどの林産物採集は1950年代までは見られたが、それ以後はほとんどおこなわれなくなった。代わりに、村外での仕事としては、賃金を得るための出稼ぎが主に未婚の若い男によって盛んにおこなわれた。²⁴⁾ しかし、彼らも結婚後は湿地田稲作とゴムの仕事をするために村に残って生活を送るのが普通であったという。この時期には、米、ゴムを中心とした換金作物の価格が良かったために、多くの壮年男性が村に残り、それらの生産に従事したのである。

(2) 湿地田の移動と分布の状況

a. 商品米の生産に有利な場所への移動

開拓期を過ぎると村周縁に残った原生林に出かけて田を拓くことはほとんどなくなり、湿地田はロングハウス近隣に作られるようになった。そして、戦後復興してきた周辺の町からの米需要に応じて生産量を増やすため、田の面積は徐々に拡大されていった (図 3b)。さらに、1960年代以降、バラム川流域に数多く出現した伐採キャンプの米の需要が加わって米の商品性がより高まった結果、田はなお一層拡大されたという。その際、田が作られる場所は図 3b に示すロ

21) ゴム園と湿地田との関係について、サラワクの第2省 (現在のスリアマン省) では、1950年代および1960年代に丘陵でのゴム園の増加が焼畑適地を奪ったことにより、水田が増加したという報告がある [Cramb 1988: 124–125]。しかし、N村ではゴム園は増えたものの焼畑のための土地は十分にあり、ゴム園の増加と関係して湿地田が増えたわけではなかったという。

22) ほとんどが他地域から出稼ぎ (*bejalai*) に来たイバンである。彼らは、村のゴム園で樹液を採取して売り、もうけを園の所有者と折半した。このような働き手は、1950年頃から1960年代中盤までN村にいたという。

23) 村びとや農業局の農業普及員からの聞き取りによる。

24) 村びとによれば、出稼ぎとして、1960年代には木材伐採の現場や製材所、また、道路建設現場での人夫としての仕事、1970年代にはそれらに加えミリオおよびその近郊での住宅や高層建築物などの建設現場での仕事を中心におこなわれた。

ングハウスの東側の地区からソン川沿いに移っていった。その結果が、図 3c で示された湿地田の分布に現れている。これは、ソン川沿いに広がる「大湿地 (*paya besai*)」と呼ばれる地区を中心に大きな田が集中して作られた結果である。村びとによれば、1970年代中盤はN村の歴史の中で湿地田の面積が最大となった時期である。このころ規模の大きい経営をしていた世帯は、4~5 ha ほどの田を作っていたと推定される。²⁵⁾ ロングハウスから離れた田を持つ村びとは、農繁期には居住性に劣る出作り小屋 (*langkau*) に寝泊まりして作業をした。

田を開く場所としてソン川沿いが選ばれたのには2つの理由がある。ひとつは、ソン川の水運が利用できたことである。元来、歩きにくく移動に労力がかかる湿地では、大量の収穫米の運搬方法が問題となる。ソン川は川幅が3~4 m あり、流木の除去や土手の補修などの管理をすればロングボートによる往来が可能な村内唯一の川である。そこで、ソン川沿いに田を開いた世帯が川の維持管理を分担しておこなうという取り決めがなされ、その水運が利用されるようになった。収穫米は田から直接ロングボートに積まれ、ロングハウスあるいはクアラニャボールまで運ばれた。もうひとつの理由は、大きな田を開くために村で最大の湿地が広がるソン川沿いが適していたことである。当時は3年連作後に田を移し、新たな二次林に田を開くという稲作がおこなわれており、そのシステムを維持するためにも広い土地が必要であった。

特徴的なことは、全湿地田面積の増加にもかかわらず、同時期の世帯数にそれほどの増加が見られないことである。図 3 から計測した湿地田の分布範囲と各年の村の世帯数は、1947年には75 ha で29世帯、1961年には297 ha で46世帯、1977年には534 ha で55世帯である。1947年から1961年の間、田の分布面積は4.0倍になったのに対し、世帯数の増加は1.6倍にとどまった。次に、1961年から1977年の間に田の面積は1.8倍になったのに対し世帯数は1.2倍になった。1947年から1977年の間に、世帯の構成人数の急激な増加などの変化は見られなかったといわれているので、世帯数の増加と人口の増加がほぼ比例しているとすれば、田の面積の拡大の率は、人口増加率を大きく上回っている。つまり、人口増が湿地田の拡大を誘発したのではなく、前述のように米が商品として大きな価値を持ったことにより、その増産のために田が拡大したと考えられる。調査年では、村の半数程度の世帯のみが湿地田稲作をおこなっていたのであるが、1980年頃までは、すべての世帯が田を作り、米を売っていたと村びとは当時を振り返ってくれた。

一方、N村の湿地田の拡大は、政府が進めていた米の自給化政策²⁶⁾ による直接的影響を受け

25) 村びとは、当時の大きい田は目算で10エーカー (約 4 ha) 以上あったという。また、豊作年に収穫の多い世帯では、100グニ (*guni*: 米などを入れる袋) ほどの米 (60 kg/グニとして 6,000 kg (籾重)) がとれたという。豊作年の収量を 1,200 kg/ha として田の面積を推算すると 5 ha になる。

26) ブルック時代から米が自給ができず、輸入にたよってきたサラワクでは、米の増産が農業分野の主政策のひとつとなり、水稻作への援助 (Assistance to Wet-Padi Planters) 計画 (1959年)、灌漑排水局の設置 (1967年)、また米自給政策 (1973年) などの制定により水田稲作を増やす試みがなされた [Solhee 1988]。

た結果見られたものではなかった。その政策下、州内のいくつかの地区で灌漑・排水施設が設けられ水田造成が進められたが、N村周辺はバコン川の増水による洪水害を頻繁に受けるため、その実施対象地区からはずされたという。²⁷⁾ 湿地田の拡大とソン川沿いへの田の集中は、米の商品性が高まったことを主な要因としておこったのである。

b. 休閑による雑草対策のための田の移動

米が商品化した1960年代および70年代には、ほとんどの湿地田は主に二次林または草地が開かれ作られた。すなわち、二次林を開いた田での最初の収穫後（4月）、そこは再び本田準備をはじめめる7～8月までの間にエンパサン *empasang* (*Scleria sumatrensis* Retz.) と呼ばれるカヤツリグサ科の大型多年草（草丈2m前後、以下、カヤツリグサ）が密生する草地となる。2年目および3年目はそのカヤツリグサ草地を開き、火入れすることによって本田準備がなされた。²⁸⁾ カヤツリグサ草地の伐採作業は性別に関係なくおこなわれるが、二次林の伐採は、原生林の場合よりは人手がかからず容易であるものの、やはり男の仕事である。この時期、村には男手が残っていたため、林地伐採のための労働力の問題は小さかったという。

本田準備後、植付けは散播によっておこなわれた。N村では1970年代終盤までは苗代はまったく作られず、すべて散播によって植付けられた。同じ場所で3年間連作すると、散播後に出現する雑草が増え、²⁹⁾ 稲に影響を及ぼす。特に、ソン川をやや遡ったところの湿地では、湛水する頻度が減るため、雑草が多く出たという。このため、3年連作後、田は放棄され、4年目の稲作は新たな二次林に田を開いておこなわれた。一方、1970年代終盤になると、ロングハウスに近く、洪水害や獣害の少ない稲作に好条件の地区では、除草剤パラコート³⁰⁾ の利用と移植による植付けによって4年以上の連作がおこなわれるようになった。しかし、それはごく一部であり、ほとんどの田では前述のとおり3年連作後、新たな二次林に田を開く方法がとられていた。

移植をすれば雑草との競争に強い稲作が可能となる。しかし、村びとは、作業量がかかる移植では当時の広い田での植付けは困難であったと断言する。³¹⁾ また、同様に人力や除草剤の散布³²⁾ による除草も手間や経費がかかりすぎた。N村では、当時の稲作作業の従事者数は、男手

27) 農業局の農業普及員からの聞き取りによる。

28) 刃渡り1mほどの山刀を野球のバットスイングの要領で振り、カヤツリグサを根元から刈っていく。刈り終わったら、1～2週間ほど放置・乾燥させ、火入れする。カヤツリグサ草地での稲作の詳細については、市川〔2000: 79–83〕を参照されたい。

29) 代表的な雑草は、アカバナ科チョウジタデ属のエンチュルンガ *enchurunga* (*Ludwigia* sp.) である。

30) パラコートは、非ホルモン型の接触性除草剤で、草種による選択性は少なく、ほとんどすべての草に強い除草効果を示す。村でのパラコートの使用法については市川〔2000: 81〕を参照されたい。N村でパラコートは1970年頃にはすでに知られており、当時コショウ園の除草のために使われていたが、当初、稲に悪影響を及ぼすと信じられ、稲作にはほとんど使われなかったという。

31) 植付けにかかる労働量を調査年におけるN村で見られた作業から推定すると、移植には56人日/haかかるのに対して、散播は間引き移植の作業を含めても10.5人日/haの労働力ですむ〔市川 2000: 87〕。

32) ただし、散播による植付け後、除草剤2,4-Dがまかれることがあった。しかし、雑草の状況や稲作世

が村に残ったとはいえ、一般的に世帯当たり2～4名ほどであった。さらに、村内では労働力の余剰が少ないため、稲作作業のほとんどが世帯内の構成員によっておこなわれていた。³³⁾ N村では、林地休閑による雑草の抑制により散播が可能であったため、米の商品性の高まりに応じて少ない労働力で広い田の植付けをおこない、米を増産することが可能であったのである。

3. 稲作が縮小した時期（1985年頃～調査年（1998年））

(1) 村を取り巻く社会・経済的背景

a. MB 道路の通過およびミリの発展とクアラニャボール華人商人の離散

MB 道路が村の北西部を通過したのは1965年であった。それ以前は村からミリまでは徒歩で1日かかったが、道路の開通によって車があれば未舗装の当時でも1時間ほどで行けるようになった。³⁴⁾ 道路が開通してからも、ほとんどの村びとは、米やゴムの生産に有利で、それらの出荷が容易な川沿いで引き続き暮らしていた。³⁵⁾ しかし、MB 道路のビントゥル方面への延伸とミリの発展に伴い交通量が増えた1970年代半ば頃からは、川沿いに住む村びとも MB 道路沿いに小屋を設けて、そこで野菜や手芸品（竹製の平ザルなど）等売るようになった。また、1970年頃作られたコショウ園は、バコン川沿いのロングハウスから MB 道路へ至る途中の丘陵斜面に開かれ、収穫物はクアラニャボールより価格のよいミりに MB 道路を通じてだされた。このように、1970年代以降、MB 道路やミリの市場の影響を受け、村びとの生活圏は川沿いから道路沿いに徐々に移っていった。

ミリは、戦災による壊滅的被害から復興し、1960年代以降、商業木材伐採やミリ沖の海底油田開発による石油産業の隆盛に伴って急速に発展した。バラム川の木材伐採は1990年代前半まで盛んにおこなわれ、ミリの石油産業も順調に伸び続けた。³⁶⁾ また、ミリ周辺ではオイルパームプランテーションの開発が MB 道路開通以降進んだ。³⁷⁾ これらの周辺地域の盛んな産業の影響を受けて、1980年代および1990年代前半にミリは以前にもまして急速な成長を示した。1980年

↘ 帯の経済状況により、すべての田で除草剤が常用されていたわけではなかった。雑草の抑制は、主に田を放棄し林地休閑させることによりおこなわれていたという。なお、サラワクでは、遅くとも1954年には種類不明であるが液体および粉の除草剤の輸入が記録されている [Department of Agriculture Sarawak 1965: 90]。

33) ただし、一部の特に生産量が多かった世帯では、収穫の際、他世帯の村びとを作業者として雇うことがあったという。

34) 村びとによれば、定期バスの運行が始まるのは1970年代初めで、それまでは公共事業局のトラックなどに相乗りを頼みミリへ出かけたという。

35) 一部の村びと（8世帯）が道路建設中の1964年に川沿いのロングハウスから分かれ、道路沿いに居をかまえたが、当時の大部分の村びと（47世帯）はそれまでどおり川沿いでの生活を続けた。

36) サラワクの丸太輸出量は、1990年代前半まで増え続け約1,500万 m³ にのぼった。同様に石油輸出量も増え続け、1996年では1千万トン近くに及んでいる [Department of Statistics, Malaysia 1997]。

37) 特にサラワクの1990年代前半以降のオイルパームプランテーション面積の伸びは著しく、1996年には約16万 ha に達している [Department of Statistics, Malaysia 1997: 47]。このプランテーション開発の中心地がミリ・ビントゥル間であった [King 1993: 277]。

のミリの市街地人口は約5万2千人であったが、1991年にはそれが約10万3千人とほぼ2倍に増加した [Department of Statistics, Malaysia 1997: 26]。また、1980年代半ば以降進んだ MB 道路の舗装化や拡幅などの整備により、ミリへのアクセスの利便性は向上していった。

このような背景の下、バコン川流域では、MB 道路へのアクセスが容易なイバンの村々は、それまでの川を介した川沿いの商人集落との関係を、道路を介したミリとの関係に次第に移行させていった。その結果、クアラニャボールの商人達は、取引相手のイバンの村々をミリに徐々にとられることにより商売が立ち行かなくなり、1985年に4軒すべてが店を閉じミリやマルディなどへ転居した。³⁸⁾

b. 村びとの MB 道路への移住と村の様々な物産の商品化

1980年頃から米やゴムの商品としての魅力が薄れてきた。村びとによれば、米の売値は下がることはなかったが、³⁹⁾ 村での他の仕事から生み出される利益との比較において米の重要性が低下した。ゴムも同様で、その値が1985年以降2リンギット/kg前後を変動しており、1980年頃と比べて極端に悪くなっていないが、その仕事の重要性はやはり相対的に低下したという。このような背景に加え、N村で米とゴムの商品性が一気に低下したきっかけは、クアラニャボールの華人の転居であったという。それにより、川沿いに住む村びとたちは米やゴムの売り先を失った。同時に、彼らは、砂糖、塩、コーヒー、缶詰め等の日用品の購入先も失うことになった。⁴⁰⁾

村びとの日用品の購入先はミリへ移った。彼らは、1985年以降ミリに出やすい MB 道路沿いに仮住まいの小屋を建てた。川沿いのロングハウスと道路との間は、片道2時間ほどかけてぬかるみの多い小道を歩かねばならないが、村びとはその間を往復する二重生活を始めた。このころには、MB 道路の整備により村からミリまでの所要時間はバスでわずか30分程となり、運行本数も増えてミリへの「距離」はさらに縮まった。1995年に新たなロングハウスが MB 道路沿いに建設され始め、生活拠点は完全に道路沿いに移った。道路沿いは川沿いに比べて湿地の範囲が限られ、大きな田を開くには向かない場所である。ゴム園も主に川沿いのロングハウス近くに分布しており、道路沿いには限られていた。

1985年以降、村びとは道路わきの販売小屋で以前より多くの村の産物を盛んに売るようになった。例えば、ラタン製の籠類、⁴¹⁾ 山菜（シダ類やラタン類の若芽など）、焼畑から採れた野菜類、

38) N村の村びとやブルルの華人商人からの聞き取りによる。

39) ただし、1980年代以降の国際的な米の過剰生産に伴う輸入米価格の安値 [小田 1999: 96] が地元米の価格に影響した可能性はある。

40) もし、米やゴムを売ろうとすれば、船外機付きのボートで1時間かけブルルまで行かねばならず、それは燃料費がかかるため割に合わなかった。また、運搬が容易な日用品はミリで購入できるが、川沿いのロングハウスと MB 道路の間（徒歩で2時間）を往復しなければならなかった。

41) ラタンの籠類は、昔から村で作られていたものではなく、1985年頃から商品用に村びとによって創り出された。最初は、華人が売っている籠などを真似て作ったという。

果実類などである。また、ミリにそれらを運び街頭でも売るようになった。そこでは1995年から2, 3世帯によって米も売られるようになった。⁴²⁾ さらに、コショウや家禽はミリの華人商人に売られた。出稼ぎの形態も米やゴムの商品性が高かったころとは異なってきた。1980年代以降の出稼ぎは、成長を続けるミリ周辺の住宅建設やインフラ開発などの作業現場での短期契約の仕事が多く、村での人の出入りが激しくなった。また、村内での米やゴムの仕事を中心であった頃とは異なり、結婚後も夫のみが長い期間、また、妻子連れの家族で長期間村を不在にして出稼ぎに携わる世帯が増えた。1985年以降、米とゴムの販売は、限られた一部の世帯では見られたが、ほとんどの世帯の主な現金収入は上で述べたような米、ゴム以外の仕事から得られるようになった。調査年では、米・ゴムの仕事はきつい割に収入が少ないとして、稲作は約半数の世帯で、ゴムの仕事はほとんどすべての世帯で敬遠されていた。

(2) 湿地田の移動と分布の状況

稲作が縮小した1985年ごろから調査年（1998年）までの田の場所の変遷と移動の理由について、いくつかの世帯は明確に記憶しており、具体的な事例を聞き取りにより確認できた。ここでは、DおよびJの2世帯の田の場所の変遷を示した（図4、表1）。D世帯は、村の中でも土地持ちで80 haほどを保有している一方、J世帯の土地保有面積は村の中でも決して多くはなく12 haほどである。⁴³⁾ ここでは、各世帯の土地保有面積の多少と田の移動頻度や移動先が関係あると考え、上の2世帯の例を示してみた。移動頻度については、N村では村びとどうしで土地を無償で貸し借りすることが普通に見られるため、土地の少ないJ世帯は土地を借りることによって3～4年ごとに田を移動させていた。ただし、田を開く場所については、D世帯が利便性の高いロングハウスの近くを開けたのに対して、J世帯はロングハウスから離れた場所に田を開いていた。これは、J世帯はロングハウスに近い便利な土地を借りられないからだという。

以下では、DおよびJ世帯の事例を交えながら、N村で見られた1985年から調査年までの田の移動について説明する。

a. 田の縮小とMB道路沿いへの移動

クアラニャボールの華人商人が離散し、米の売り先の消失によるその商品性の急落に伴い、1985年以降、田の面積は一気に縮小され、稲作は主に自給米の生産のためにおこなわれるようになった。湿田稲作を止める世帯も次第にでてくる。米の生産量が落ちたことにより、運搬の問題が小さくなり、ソン川沿いの水運を利用する必要性は低くなった。このため田は1985年を

42) 輸入米より食味に優れる現地米は、前者と差別化され、よりよい値段でミリなどの都市で売られるようになった。

43) 土地の測量、登記はなされておらず、正確な保有面積は不明であるが、ここでの数値は各世帯の自己申告と土地の事情に詳しい村びとからの聞き取りにより推定した。

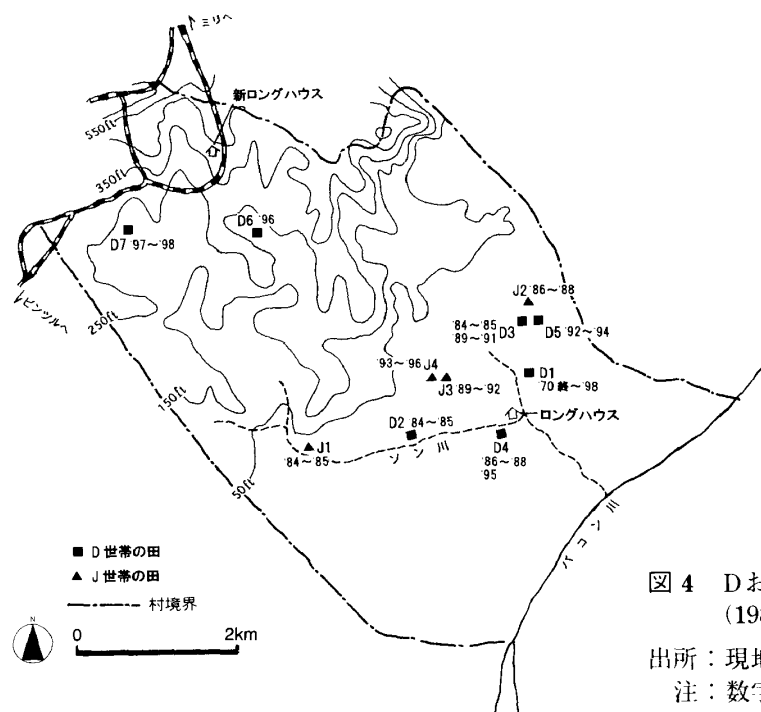


図4 DおよびJ世帯の湿地田の場所の変遷
(1984～1998年)

出所：現地調査より筆者が作成。

注：数字は田を作った年。

表1 DおよびJ世帯の湿地田の場所と移動の理由

植付け年	D 世 帯		J 世 帯	
	筆(植付け法)	移動の理由	筆(植付け法)	移動の理由
1984	D1(t) D2(b) D3(b)	(移動なし)	J1(b)	(移動なし)
1985	D1(t) D2(b) D3(b)	(移動なし)	J1(b)	(移動なし)
1986	D1(t) D4(b) —	米の商品性の急落による田の面積縮小に伴い3筆から2筆へ。1筆をロングハウスにより近い場所に開く。	J2(b)	米の商品性の急落に伴い、小さい田をロングハウスにより近い場所に開く。J1は他世帯の土地であった。
1987	D1(t) D4(b) —	(移動なし)	J2(b)	(移動なし)
1988	D1(t) D4(b) —	(移動なし)	J2(b)	(移動なし)
1989	D1(t) D3(bt) —	獣害のためD4からD3へ移動	J3(b)	他世帯の土地のJ2から、自有地に移った。
1990	D1(t) D3(bt) —	(移動なし)	J3(b)	(移動なし)
1991	D1(t) D3(bt) —	(移動なし)	J3(bt)	(移動なし)
1992	D1(t) D5(bt) —	雑草発生のためD3からD5へ移動	J3(bt)	(移動なし)
1993	D1(t) D5(bt) —	(移動なし)	J4(bt)	雑草の発生
1994	D1(t) D5(bt) —	(移動なし)	J4(bt)	(移動なし)
1995	D1(t) D4(bt,t) —	D3はロングハウスから遠く収穫米の運搬が重労働のため、より近いD4に移動	J4(bt)	(移動なし)
1996	D1(t) D6(bt) —	1筆は道路沿いの新ロングハウス近くに開く。	J4(bt)	(移動なし)
1997	D1(t) D7(bt) —	D6の田は水掛りが悪いためD7へ移動	—	(主作業者が病死のため中断)
1998	D1(t) D7(bt) —	(移動なし)	—	—

出所：現地調査より筆者が作成。

注：1. 植付け法は、b: 散播, bt: 散播後、苗代の苗を補植, t: 移植である。詳細は、市川 [2000: 82-84] 参照。

2. 田の移動の理由は、各世帯からの聞き取りによる。

表2 地区別の湿地田筆数の変化

植付け年	1995年	1996年	1997年	1998年
バコン川沿い(筆)	30	13	9	13
MB 道路沿い(筆)	20	32	41	40
計(筆)	50	45	50	53
湿地田稲作世帯数(世帯)	38	40	47	46

出所：現地調査より筆者が作成。

注：2筆の田を持つ世帯があるため、筆数の計と世帯数は一致しない。

境にソン川沿いから生活に便利な当時の川沿いのロングハウス周辺に移された。例えば、D世帯でのD2からD4への、また、J世帯でのJ1からJ2への田の移動がこれに当たる。

村びとがMB道路沿いで過ごす時間が増えるにつれ、田も次第に道路沿いの湿地に移された。特に、ロングハウスが完成した1996年以降は、道路沿いの田の筆数が川沿いを大きく上回るようになった(表2)。D世帯は1996年に川沿いのD4を放棄し、道路沿いのD6を新たに開いているが、他の多くの稲作世帯も同様に田を移した。なお、表2において、1995年の稲作世帯数が少ないのは、ロングハウスを建てるための現金が必要となり、出稼ぎや換金産物の生産を優先して、湿地田稲作を一時中断した世帯がいくつかあったためである。その後、建築がある程度進展した1996年以降には稲作を再開する世帯が現れた。

b. 多様化した栽培方法と一部の田での連作年数の長期化

1980年代以降は本田準備が山刀での伐採によってだけでなく、除草剤の散布によっておこなわれ、また、植付けが散播だけではなく移植によっておこなわれるなど、栽培方法が以前より多様になったという。栽培方法の詳細は、すでに報告済みの前稿[市川 2000: 79-85]を参照されたい。

田が二次林に開かれ作られることは少なくなり、⁴⁴⁾ほとんどがカヤツリグサ草地かエンクロポツ *enkropok* (*Leersia hexandra* Sw.) と呼ばれるイネ科のタイワンアシカキの優占する草地に開かれた。草地が主に開かれたのは、除草剤の利用や移植による植付けによって雑草の問題がなくなり、また、手間のかかる林地の伐採が避けられていたからであった。その背景には、伐採作業の担い手である男が出稼ぎでしばしば村を不在にすることがあるという。

村では、以前のような出作り小屋での長期間の滞在は嫌われるようになり、道路沿いの家屋(1985年ごろから1996年までは個別の家屋、1996年以降はロングハウス)中心に生活が営まれるようになってきた。そこは、山菜などの商品を集め、MB道路沿いあるいはミリに運び売る際の拠点となったほか、ラタン籠等を製作するための作業場としても快適で商品の生産が効率よ

44) 例えば、調査年(1995-96年)では、林地に開かれた田は4筆であったのに対し、草地には46筆が開かれた[市川 2000: 88]。林地が開かれたのは、4筆中3筆の場合、田をバコン川沿いからMB道路沿いに移した世帯が二次林を開いたためであった。

くおこなえるためだという。このため、家屋に近い場所に連作期間を延ばしてより定着的に作られる田が増えた。1995年に開かれた田は、計50筆中、27筆が連作年数4年未満であった一方、23筆が連作年数4年以上であった〔同上論文：88〕。最長でも3年の連作までであった1970年代までと比べ、連作年数の増えた田が多い。長期連作化の傾向は、1970年代終盤から一部で始まっていた。表1のD1の田のように、当時の川沿いのロングハウスに近く、洪水害や獣害の少ないなどの稲作に好条件の場所では、調査年（1998年）に至るまで約20年間連作されてきた田も見られた。そこでは雑草の問題が除草剤の利用や移植によって解決されていた。一方、連作年数が4年未満の田は全筆中の半数以上を占めた。これらの田の移動の理由は、表1に見られるように、雑草の発生や獣害などの栽培上の問題を避けるためと、すでに述べたとおり道路沿いに新たな田を開くなどであった。

IV おわりに ——移動と散播が支える湿地田稲作——

本文より明らかなように、N村では入植時から調査年に至るまで、ほとんどの場合、湿地田稲作は田の移動を伴いながらおこなわれてきた。田の移動を引き起こす要因は2つに要約できる（表3）。ひとつは、雑草害や獣虫害を避けるなどの栽培技術的な要因であった。村びとは特

表3 各時期における湿地田の移動とその主な要因

時 期	社会・経済的要因	栽培技術的な要因
開拓期 (1900年頃～ 1950年頃)	土地の先取占有の慣習により、ひとつの田で1～2年の栽培後に新たな原生林を拓くために移動した。	——
米が商品化した時期 (1950年頃～ 1985年頃)	周辺町での米の需要に応じて田は拡大し、1960年ごろにはロングハウス周辺に集中した（図3b）。その後、伐採キャンプでの需要により米の商品性がさらに高まった結果、広面積の田が1970年代にはソン川沿いに集中した（図3c）。	二次林に田を開き3年連作後、雑草が発生するため、他の二次林へ移動し田を開いた。
稲作が縮小した時期 (1985年頃～ 1998年)	米の商品性の急落により、田は小さくなるとともにロングハウス周辺へ移動した。さらに、村びとが物品の売買に便利なMB道路沿いへ移住し、新たなロングハウスを建てた結果、田も道路沿いに移った。 ミりで売る品の準備に便利なロングハウスの近くに田が好まれて作られるようになり、連作年数は長期化した。	除草剤と移植により、4年以上連作される田が増える一方、散播田は4年未満の連作後に休閑地へ移った。

- 45) 福井〔1980〕は、休閑をサラワクの湿地での稲作の特徴のひとつとしてあげており、それは土壤の肥沃性を高めるためであるとしている。この点についてN村の人々は、近年までの稲作の中心であったバコン川沿いの湿地には、しばしばもたらされる洪水によって新しい土が供給されるため、肥沃性の問題はないという。すでに本文で述べたように、調査年まで20年ほど施肥無しで連作されてきた地区も見られた。

に雑草対策としての休閑地への移動の必要性を強調する。⁴⁵⁾ もうひとつは、社会・経済的な要因である。これには、土地の先取占有の慣習に基づく村びと自らの土地を増やす開拓のための移動、商品米の生産・運搬に有利な場所への移動、また、ミリへのアクセスのよい道路沿いへの転居に伴った田の移動、といった事例が見られた。

移動する田で選択されていた栽培技術はほとんどが散播であった。前稿で述べたように、1995年に開かれた田で連作年数4年未満の27筆中20筆では散播がおこなわれていた [同上論文]。また、表1に見るように、定着田のD1ではすべて移植で稲作がおこなわれていたの対して、1～4年ごとに移動していた田ではすべて散播で行われていた。散播がおこなわれる理由は、移植に比べて散播では植付けにかかる労働力を大きく節約できるためである [同上論文: 87]。特に、本文中にも述べたように、倒木や株が多く残る森を拓いた直後の田では、散播のほうが効率的な作業ができる。ところが、散播稲作には雑草に弱いという問題点がある [黒澤 1994]。休閑地に開かれた田では雑草が少ないためこの問題が起きない。これが移動田で散播がおこなわれた理由である。労働省力的な特徴を持つ散播技術があったため、開拓期には原生林が拓かれた田でも容易に植付けができ、また、米が商品化した時期には広大な田での植付けが可能となったのである。一方、近年では田の移動先のほとんどが休閑草地で、そこは森に比べれば雑草が多いものの、倒木などの障害物はなく、開かれる田の面積が小さいこともあって、移動田でも、散播より稲の生育が確実な移植でおこなわれる田も一部で見られた。

ところで、東南アジア島嶼部の湿潤気候下の湿地に作られた移動水田が、やがて畦畔や水路の造成を経て、徐々に定着化していく事例や [Seavoy 1973]、開墾された水田に次第に畦畔や水路が整備されていく事例が報告されてきた [田中 1982]。では、N村の田もこうした発展をたどるのであろうか。1970年代終盤以降のN村では、除草剤の普及と移植により雑草問題が解決され、村の様々な産物の商品化などの経済環境の変化を背景として連作年数が長期化し、田の定着性が高まった。しかし、表1のD1のように長年連作されてきた田においても畦畔や水路はまったく見られない。また、D世帯はその長期連作田がMB道路沿いの新たなロングハウスから遠いという理由により、今後もそこで定着的に稲作を続けるかは定かでないという。つまり、湿地田は、長期間連作はされても、畦畔などの造成のための労働投入がまったくおこなわれないため、随時移動したとしても何ら心理的、経済的負担が伴わない、「移動することが容易な田」であるといえよう。

以上の様なことから、N村の湿地田稲作を見る限り、焼畑のように移動することを常とした田での散播稲作、すなわち、散播移動湿地田稲作とでも呼ぶべき稲作が東南アジア島嶼部の湿潤気候下の湿地に存在しているといえる。N村の湿地田稲作は時期ごとにその意味を変化させてきた。例えば、開拓期には自給米生産と同時に原生林を拓くための稲作、米の需要が増えた時期には商品米を生産するための稲作、そして、道路沿いにおいて稲作以外の仕事の重要性が

増した近年では、ロングハウスの近くで自給米の生産のための稲作としておこなわれてきた。つまり、田の移動と散播技術を伴う湿地田稲作は、田の面積と場所を自在に変えつつ、社会・経済環境の変化に応じて求められる役割を果たすことによって、N村のイバンを支えてきたのである。

謝 辞

本稿は1996年1月に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した修士学位請求論文「サラワク州バコン川流域村落における生態利用の変遷と社会・経済的背景」の一部にその後の研究成果が加えられ執筆された。修士論文と本稿の作成にあたっては、京都大学東南アジア研究センターの山田勇氏、田中耕司氏、安藤和雄氏からご教示をいただいた。また、現地調査では、調査村の方々にひとかたならぬお世話になった。1995年から1996年の現地調査は、財団法人大阪国際交流センターからの大阪アジアスカラシップ、および財団法人住友財団からの環境研究助成によって、1997年の現地調査は、財団法人高梨学術奨励基金からの助成によって、また、1998年の調査は、財団法人大和銀行アジア・オセアニア財団からの国際交流活動助成によっておこなわれた。ここに記して謝意を表します。

参 考 文 献

- Chew, D. 1990. *Chinese Pioneers on the Sarawak Frontier 1841-1941*. Singapore; Oxford; New York: Oxford University Press.
- Cramb, R. A. 1988. The Commercialization of Iban Agriculture. In *Development in Sarawak*, edited by R. A. Cramb and R. H. W. Reece, pp. 105-134. Center of Southeast Asian Studies, Monash University.
- Department of Agriculture Sarawak. 1965. *A Digest of Agricultural Statistics*. Kuching.
- . 1972. *Soil Map of Sarawak*. Kuching.
- . 1981. *A Digest of Agricultural Statistics*. Kuching.
- Department of Statistics, Malaysia (Sarawak Branch). 1997. *Yearbook of Statistics 1997 Sarawak*. Kuching.
- Freeman, J. D. 1955. *Iban Agriculture: A Report on the Shifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak*. London: H. M. S. O.
- 福井捷朗. 1980. 「サラワク低地の土地利用と未利用」『東南アジア研究』17(4): 708-740.
- 市川昌広. 1997. 「サラワク州バコン川流域村落における生態利用の変遷と社会・経済的背景」(修士学位論文) 京都大学大学院人間・環境学研究科.
- . 2000. 「サラワク州イバン村落における湿地田稲作——植付け方法にみる適応戦略」『東南アジア研究』38(1): 74-94.
- Kaur, A. 1998. A History of Forestry in Sarawak. *Modern Asian Studies* 32(1): 117-147.
- King, T. K. 1993. *The People of Borneo*. Oxford: Blackwell Publisher.
- 黒澤 健. 1994. 「直播栽培」『農学大辞典』野口弥吉; 川田信一郎(監修), 1300-1303ページ所収. 東京: 養賢堂.
- 小田紘一郎. 1999. 『新データブック世界の米』東京: 農山漁村文化協会.
- Pringle, R. 1970. *Rajahs and Rebels: The Iban of Sarawak Under Brook Rule, 1841-1941*. Ithaca, N. Y.: Cornell University Press.
- Sandin, B. 1994. Sources of Iban Traditional History. *The Sarawak Museum Journal* No. 67. Special Monograph No. 7.
- 佐々木高明. 1970. 『熱帯の焼畑』東京: 古今書院.
- Seavoy, R. E. 1973. The Transition to Continuous Rice Cultivation in Kalimantan. *Annals of the Association of American Geographers* 63(2): 218-225.
- . 1980. Population Pressure and Land Use Change: From Tree Crops to Sawah in Northwestern

- Kalimantan, Indonesia. *Singapore J. Trop. Geogr.* 1: 61–67.
- Solhee, H. 1988. The Rice Self-Sufficiency Policy: Its Implementation in Sarawak. In *Development in Sarawak*, edited by R. A. Cramb and R. H. W. Reece, pp. 69–103. Center of Southeast Asian Studies, Monash University.
- Stulive, V. H. 1992. *The Iban of Sarawak*. Kuala Lumpur: S. Abdul Majeed & Co.
- 高谷好一. 1978. 「水田の景観学的分類試案」『農耕の技術』創刊号: 5–42.
- _____. 1985. 『東南アジアの自然と土地利用』東京: 勁草書房.
- 田中耕司. 1982. 「南スラウェシ州ルウ県北部への人の移動と水田農耕の技術変容」『東南アジア研究』20 (1): 60–93.

The Sarawak Gazette (day/month/year)

1/3/1883; 1/5/1884; 2/7/1900; 1/2/1902; 1/4/1902; 5/6/1906; 4/4/1907; 17/1/1910; 1/11/1911; 16/9/1913; 1/4/1915; 16/3/1917; 1/8/1918; 1/4/1920; 2/8/1920; 1/12/1925; 2/1/1930; 1/8/1930; 1/4/1931; 2/12/1935; 30/9/1963; 31/7/1969

Land & Survey Department. 各年航空写真.